

水中の生き物①

5歳児クラス 16名90分

活動

- ・園庭のピオトープ作り
- ・水中の生き物などを描画で表現する

○活動内容

- ・どんな生き物がいるのかどんなものが必要か？調べてみる。
- ・調べたり、想像したりした水中、水辺の生き物を描画で表現する
- ・実際にピオトープを作る

○保育者の問いかけやアプローチ

- ・クラスの子がオタマジャクシを持ってきたことをきっかけに、小さな水槽と大きいピオトープならどっちがオタマジャクシは嬉しいかな？どんなものが必要かな？水だけでいいかなとも投げかけた。
- ・クラス内の本棚には、水の生物、両生類・爬虫類・魚等の図鑑や生き物の飼育に関する本を準備する。

○子どもの様子

図鑑で調べる姿や気に入った魚や生き物の絵を描く姿が見られた。水中の生き物だけでなく、水辺にすむ生き物などにも注目していて、中には、トンボの種類がたくさんある事や、エビの種類の違いに気が付く子がいた。図鑑を見ながら、リアルに「足の数が〇本だったよ」「触覚みたいのが生えているんだね」と会話をしながらたくさん水中の生き物や、水辺の生き物を描き、表現を楽しむ姿が見られた。また、リアルな生き物だけでなく、こんな魚がいたらいいなと想像した生き物を描く姿も見られた。生物だけではなく、生き物が住む環境にも目を向ける子がいた。散歩でピオトープの底や周りに置く石を拾いに行くことにした。実際に多摩川の河川敷に行ったことで、水辺には草花が生えていることや、大小の石や砂、などがあって子どもたちの印象に残っていたようで、園庭のピオトープにも再現しようとする姿があった。

準備したもの

- ・トロ舟（業者が設置）
- ・底砂・水草
- ・画用紙、クレヨン、絵の具



○振り返り

・昨年度の年長児が水辺の環境が壊され、トンボの中には絶滅危惧種がいることを知り、「園庭にトンボが来られる場所があったらいいな」と言ったことがきっかけでビオトープ作りが引き継がれたことを今年の年長児にも伝え、ビオトープ作りが始まったが、子どもたちの中には、ビオトープのイメージができなかったので、電子黒板や写真を使ってイメージを持てるようにした。

「昨年度の年長児の想い」を「今の年長児がどのように引き継いで主体的な活動にしていくのか」ということは保育者としては大きな課題だった。職員同士で話し合いを持ったり、アイデアを持ち寄ったりしながら進めていくことにした。

まずは水辺の生き物を調べたり、表現したりすることで興味関心が広がり、そのタイミングで実際に多摩川の河川敷に行ったことで水辺の再現をビオトープに活かしている姿が印象的だった。

今後更に探究を深めるために狛江市の「水辺の楽校」に行く計画を立てることにした。

水辺・水中の生き物② 水辺の学校

5歳児クラス 16名 60分

活動

- ・水辺の楽校（園内でおこなった）

○活動内容

- ・身近な多摩川には、どんな生き物がいるのか知る。また、その生き物が生息する環境についても考えられる機会を作る。

狛江市の水辺の楽校を計画→予定していた日の暑さが厳しく、実行できず、代わりに

園内で電子黒板を使用し、トンボの産卵についての動画をみたり、保育者が調べたことなどを伝えたりしながら子どもたちの興味関心を深め考えられる機会とした。

準備したもの

- ・水の生物、両生類・爬虫類、魚等の図鑑
- ・多摩川に生息する生き物の資料保育者作成

○保育者の問いかけやアプローチ

- ・ビオトープ作りから身近な多摩川には、どんな生き物がいて、ビオトープとの違いがあるのか？投げかけ興味を持てるようにする。
- ・クラス内の本棚には、水の生物、両生類・爬虫類、魚等の図鑑を準備する。
- ・トンボの産卵の動画を見たあとで、トンボがどんなところで産卵するのか？逆にどういう状態だと産卵ができないのか？などクイズ形式で子どもたちが参加型で関心が持てるようにした。
- ・保育者からは「多摩川の今と昔」の違いなども視覚的に分かりやすく伝えた。
- ・最後に、どんな多摩川になって欲しいか？そのために何ができるか？を子どもたちに投げかけ、クラスで意見の共有し、その後、魚や葉っぱの形の画用紙に思ったことや、考えたことを記入してもらった。

○子どもの様子

- ・多摩川の水辺の楽校へ行くことを楽しみにしていた子どもたちではあったが、暑さで中止になった代わりに、園内で身近な保育者が「先生」役をやって「園内水辺の楽校」を行なったことで、楽しみながら様々なことを知ったり、考えたりする姿が見られた。

中でもトンボの産卵についての動画を見た後にクイズ形式でどんなところで産卵するか？などと質問したが、「水の中」「枝や葉っぱ」と答える姿があり、興味をもって良く見ていた姿が伝わった。また、「どうしてトンボの中には絶滅危惧種になったものがあるのかな？」という質問に対しても保育者が調べた「多摩川の今と昔の話」を聞いたことで、「コンクリートばかりになってしまったからだよ！」「明かりが多くなったから」「人や車でうるさくなったから」「川が汚くなったから」と気が付く姿があった。

最後に、投げかけた「みんなはどんな多摩川になって欲しい？そのためにみんなはどんなことができるかな？」という問いかけには「トンボや生き物がたくさんいる多摩川になって欲しい」「ごみを捨てたりしない」「ごみにならないように僕が着ている服はあかちゃんにあげるんだ」「エコバックをもって買い物をする」など様々な考えが出て環境問題についても子どもたちなりに感じる機会となったようだった。



○振り返り

- ・気温が高くなって実際に多摩川の水辺の楽校に行くことができなくなり、代わりにおこなった「園内水辺の楽校」であったが、子どもたちの興味関心を途切れさせないために、どうしたらよいかと職員同士で相談し、活動に組み入れられたことで、より子どもたちが主体的に「もっと知りたい」「自分はどうしようと思う」などと探究心を深めることにつながったので良かったと思う。

水辺・水中の生き物③ 園行事（フェスタ）

5歳児クラス 16名60分

活動

- ・コーナーの一角で子どもたちが今までやってきた水辺の楽校に関することを表現する

○活動内容

- ・子どもたちが主体となり、日頃の保育活動を行事として行っている「はなみのフェスタ」の一角に「水辺の楽校」というコーナーを作り、

準備したもの

- ・製作した多摩川
- ・水辺の生き物の描画
- ・保護者に記入してもらった画用紙とペン
- ・プレゼント（製作した生き物）

自分たちの経験から保護者を巻き込んでクイズをしたり、どんな多摩川になって欲しいか画用紙に書いてもらったり、自分たちで作った水辺の生き物の製作物をプレゼントしたりする。

- 当日までは、クラスの中でどんなことをするか話し合ったり、製作をしたり、コーナーを受け持った子どもたちが役割分担をしたり、しながら準備をした。

○保育者の問いかけやアプローチ

- 「はなみのフェスタがあるけど、そこでやりたいことある？」という問いかけの中で、子どもたちから散歩で出かけたことが印象にあり、「狛江」を表現することになった。その中で、商店街の中のお店と「多摩川もあるよ！」という意見から、「この前やった水辺の楽校をみんなもやってみるのはどうだろうか？」と提案してみる。少人数の子どもにどんなコーナーにしたいか聞き取っていった。

○子どもの様子

- どんなコーナーにしたいか聞き取りすると「今まで描いた魚の絵を飾って、見てもらいたい」「トンボクイズが面白かったから、お母さんたちにもクイズを出したい」「クイズがあたらプレゼントあげない？」「小さい子にはクイズわからなくてもプレゼントしてあげよう」「多摩川を作ったものも飾ろうよ」「お母さんたちにもぼくたちみたいにどんな多摩川になって欲しいですか？って聞いて画用紙に書いて貼ってもらおう」等々様々なアイデアや、やってみたいことが出てきた。

今までやってきたことでもあるが、改めて準備することもあり、クラスの友だちに協力してもらって多摩川を絵の具や折り紙などを使って表現したり、プレゼントを製作したりする姿が見られた。

「また続きは明日やるからさ」と、この活動を通して継続的にやり通す姿も見られたことがとても印象的だった。



○振り返り

「はなみのフェスタ」という行事の一角に子どもたちの探究活動についてのコーナーを設けたことで、保護者には表現活動として伝わるだけではなく、参加型として、一緒に子どもたちの考えたことに触れ、リアルタイムで子どもたちの探究活動について知ってもらえたとても良い機会となったと思う。また、この活動を通して、継続する力や、協力する姿、言葉でイメージを伝えるなど、年長児の10の姿につながる場面が多く見られたことも印象的だった。

水辺・水中の生き物④ 移動水族館

5歳児クラス 8名 30分×2回

活動

- ・移動水族館

○活動内容

- ・海の中の生き物に興味を持つ。
- ・係の人の話を聞いたり直接触れたりすることで、生き物との関わり方を知る。

準備したもの

- ・移動水族館業者
- 水槽・プール・ウミガメ・カブトガニ・ネコザメ・金魚・ヒトデ・ナマコ・金魚すくいの道具(ポイ・器)

○保育者の問いかけやアプローチ

- ・事前に「図鑑」や「海の生き物の折り紙の本」などを準備して興味を持てるようにする。
- ・誕生会の出し物で水族館に来る生き物の生体についてのクイズをして興味関心か持てるようにする。
- ・実際に見たり触ったりする子がいるの中、戸惑っている子には、保育者が触って見せて、安心させていく。
- ・「どんな触り心地かな？」や「金魚は何匹すくえた？」等、声掛けをして子どもたちのつぶやきや感想などを引き出す。

○子どもの様子

- ・ウミガメへの餌やりができない理由を係の人に尋ね、「なんでだろう」と疑問をもつ姿が見られた。「移動が長く、疲れてしまったようで食べたがらないんだ」という説明を聞くことで納得する様子があった。また、甲羅に触れる中で「つるつるしている」「思ったより硬い」など、実際に触れることで新たな気づきを得ていた。
 - ・子どもたちが触れるよう飼育員が抱き上げようとしたときに、亀が暴れる様子を見て、「嫌がっているみたいだからやめよう」と、亀を「生き物」として見て、子どもたちなりに考える姿が見られた。
 - ・タッチプールでは、動いているネコザメやカブトガニに初めは驚きや不安を感じる様子があったが、ナマコやヒトデなどから少しずつ触れるようになり、サメのザラザラとした感触にも驚きながら興味を持って触れていた。
- ヒトデやナマコはどこに口があって、何を食べるのか？質問する姿や、ひっくり返してみている姿があった。



○振り返り

- 直接触れるという体験を通して、図鑑からは得られない感覚的な発見や気づきをえることができたようだった。
- 多摩川やビオトープで水辺の動植物について調べてきていたので、その活動と繋がりを持つことができて良かった。多摩川がずっと流れていくと海にたどるつくことを知っている子どもたちが、今までは淡水魚だったが、今回は海の生き物ということで、海と川の違いに気が付く子もいた。せっかく違いに気が付いたのだから、海水がどのくらいの濃度なのか？という投げかけや実験を試みる、また海の中のどんな所に住んでいるのかなど海中地図などを貼りだしてみるなど、今回の活動をきっかけに子どもの探求がさらに広がるような環境作りの工夫ができたのではないかと職員同士の振り返りの中でアイデアが出た。